

『おくのほそ道』板行以前の反響：影響史の序説

白石, 悌三
九州大学大学院学生

<https://doi.org/10.15017/12352>

出版情報：語文研究. 6/7, pp.11-19, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『おくのほそ道』板行以前の反響

— 影響史の序説 —

白 石 悌 三

雑誌「解釈と鑑賞」の連載講座は杉浦正一郎先生の最後の御仕事ではなかったかと思う。こゝらで『おくのほそ道』解説の最も詳しい、いわば決定打を出したいものだというわけで、いろいろお話をうかがったのも懐しい思い出となつてしまった。御逝去によつてそれが解説篇に一応ピリオドをうたれてしまった今、私として少しばかり異論のなくもない点もあつたので、先生の御説に即しつゝ、尚お触れにならなかつた資料でいさゝか贅言を呈してみたい。

『おくのほそ道』(以後「ほそ道」と記す)原本の成立が元禄七年の初夏、その出版が元禄十五年であるから、その間芭蕉の死をばさんで八年の歳月が流れている。今日でこそ最もポピュラーな古典の一つとして疑われない『ほそ道』であるが、ではその評価がいつ頃からあつたのであろうか。それにはまず作品が読書可能な条件において存在しなければならぬ。この常識は、板行されない『ほそ道』が唯一の原本と

数冊はあつたらしい草稿本及び写本によつてしか知られなかつた八年間の反響というものを想像させる。しかもそれさえ昔のことで、僅かに書き残された断片的資料に基いて推量するはかはない我々なのであるが、尚敢えて贅説を試みようとするのは、芭蕉が生前自作を、ひいては『ほそ道』をも人に見せたがらなかつたのではないかという迷信のようなものゝ否定と、意外にも人の意識の上で『ほそ道』が作品としては成立しがたかつたという二つの問題が関連してくるからである。もっとも後者については、作者作品の關係が逆になつていつのまにか『ほそ道』即ち芭蕉と思ひ込んできた後の世の人が、作品以外の影響までも『ほそ道』の影響にしてしまった事に対する意外さが半分なのであるが。

板行の時間的な位置とその意味を確認する序説においては、いまだ「反響」の調査が「普及」「成巧」「模倣」

「影響」といった要素を未分化に含んでいる。つまりそれほどに『ほそ道』は知られておらず、又それほどに資料は乏しくその乏しい資料をしらみつぶしに見ていくより他に手はないのである。

さて刊本に『ほそ道』の名が現われるのは、管見の限りでは『枯尾花』(元禄七年か)が初見である。折から旅行中芭蕉の最期に立ち会った其角が、義仲寺の牌位の下に書きおろした「芭蕉翁終焉記」の文中に、「奥のほそ道といふ記あり」と小さく書き込んでいるのだが、その時其角ほどの程度『ほそ道』について知っていたのであろうか。十六日夜の曲翠亭における芭蕉の遺書開封に立ち合った者、おそらく其角、丈草、去来、惟然、支考、正秀、木節、乙州、土芳といったメンバーが参加したと思うが、少くとも「奥の細道」(参見日記)の存在だけは皆知った筈である。いわゆる其角本の奥に記されている「元禄十年冬、其角写於大阪旅店灯下校合畢」という一行は、その頃其角自身も、それに『ほそ道』も大阪に在ったという確証がないので疑わしいが、其角が『ほそ道』を確かに読んだという証拠には遺稿『類柑子』中の「ちからくさ」と題する一文がある。『類柑子』の草稿が成ったのは『ほそ道』が板行された二年後の宝永元年であるが、その中の「ちからくさ」、が書かれたのはこれに先立つ何年であつたらうか。

「故翁のおくのほそ道、見侍るに、尾花沢にて清風を尋ぬ。かれは富るものから志いやしからず。都にも折々通ひて、さすがに旅の情をもしりたれば、長途のいたはりさま／＼もてなし侍る。涼しさを我宿にしてねまる也 翁

——中略——

道の記の一跡。民語漸くかはるなどいへるにつけて、とみに東國のだみたる詞を一句にして、風流を発せられたるこそよき力艸成べけれ。」とあるは『ほそ道』評論史上、素竜の跋に次ぐ早期の資料であるが、その着眼がいかにも奇を衝った其角にふさわしい。ところで、こゝに抄録された「おくのほそ道」の本文は井筒屋板行本とも其角本とも違うので、もしやこれが其角から晋流に譲られた芭蕉自筆草稿本の一部ではなかつたらうかと思うのである。その甚だ弱い傍証として、『枯尾花』には「奥のほそ道」と記してあるのが『類柑子』では「おくのほそ道」となっている事に注目してよい。この表記法は昔からまち／＼であるが、少くとも原作者芭蕉が「おくのほそ道」と記した事は原本の題簽が自筆である事からまちがいなく、又『放生日』の巻頭図が示す野坡伝来の自筆草稿本も、それから自筆草稿を曾良が写した曾良本もそうなので、芭蕉におい

てこれは大体守られた表記法であつたと考へてよ
い。「笈日記」に見える芭蕉の遺書は「奥の細道」とな
っているが、これは支考の代筆である。)しかるに原作者
以外の者が、勝手に表記法を変える事はあつてもわざ／＼
原題のまゝに長々記したという事は、『ほそ道』の場合、
多くの例に鑑みて、原作者の手跡もしくはその忠実なる
写しを見たとき考へてよいのではなからうか。今問題にして
いる晋流藏の自筆草稿本も、『蕉門録』によれば「芭蕉翁
真蹟おくのほそ道集一冊」と記されている。しかし、おそ
らく板行前の事とは思ふが、この草稿本がいつ其角の手に
入つたかはわからないので、従つてはじめにのべた『枯尾
花』の記事との相関関係もわからない。

次いで『ほそ道』の名が刊本に見えるのは路通の『芭蕉
翁行状記』(元禄八年)である。路通は元禄七年冬三井寺でこれ
を書いてゐるが、その中で元禄七年七月中旬、盆会のため
に芭蕉が最後の帰郷をした際の事を「このたびは句もあ
またにて、むかしより書捨の反古、草紙どもあらため、後
の形見とにや、奥の細道・白馬集と名づく。おなし氏のし
たしき方にあづけ置たまふ。」と記している。「おなし氏
のしたしき方」とはいうまでもなく松尾半左衛門の事であ
らうから、これによれば芭蕉はこの時はじめて『ほそ道』を
兄に托したことになる。すると「元禄七年水無月予か方に

偶居ましましてかつ／＼ほめかかし給ふを、書写の事深く
乞奉りける。」(奥本)と去来が記している時には、芭蕉は
『ほそ道』を持っていながらほめかしただけで見せなかつた
事になり、従つて諸説はこの時去来が書写の許しを得られなかつた
ものとしてゐる。去来といへばかつて「幻住庵記」の未定稿につ
いても批評を求められたほど芭蕉に親炙した信頼あつき門弟
であり、その時も芭蕉は「発端行脚の事を云て幻住庵のうとき
由、難至極」(元禄三年七月頃)と去来の意見をとりいれ、『猿
蓑』所収の決定稿では「行脚の事」をほとんど削つてしまつて
ゐる。しかも去来は『猿蓑』に芭蕉の『ほそ道』旅中の作品から
取捨選択してその九句を入集せしめており、その事で凡兆と屢々
幻住庵の芭蕉を訪ねて相談してゐるから、当時構想なりつゝあつた
『ほそ道』の事についても知つてゐたに違ひない。そして翌る元
禄四年四月十八日から五月四日に至る落柿舎滞在の日々に、芭
蕉は「行脚の事」のみ一本にまとめるべく、『ほそ道』の草稿を持
つて筆をいれてゐた筈である。一カ月に近いこの滞在中にはきつ
と、素堂に相談したように(後素堂の「奥の細道」参照)、又『猿
蓑』に入集せしめる句の選択や「幻住庵記」等について相談したよ
うに、去来の意見も徹したに違ひない。この年の初秋、落柿舎を
出てからはじめて巻いた「蝸ならぶ」の歌仙には「室の八島に尋
ねあひつゝ、

去來・みちのくは花より月のさま／＼に「翁」という附合があつて、そのびつたりあつた呼吸にもこの間の事情を想像させるものがあるし、更に想像をたくましくすれば、後年『鳥の道』(元龜十年刊
玄梅撰)に發表された『ほそ道』推敲中のものと思われる句文は、この時添削した書捨ての反故かもしれないのである。『ほそ道』とは地理的にも遠い奈良の、しかも蕉門中で大した勢力ももたない玄梅がこのような資料を入手しえた徑路を詮索すれば、惟然、風国あたりを通して去來の姿がかなり有力に浮び上るからである。このような想い出があつてこそ、後になつて芭蕉は「あれ」が遂に完成した事をほのめかしたに違いない。おそらく三年前去來と別れた時まで「おくのほそ道」という題名が決つていなかったからであろう。又事情を全然知らない者に「ほのめかす」という表現はできる筈がない。又去來にしても、かように芭蕉が構想なつてから足かけ五年の間、草稿を身辺離さず持ち歩き行く先々であるいは人の意見をもきいて手を入れていた事情を知っていたからこそ、それが潜在意識となつて「……みつからおくの細道と書年月、頭陀のうちに隠して行先／＼に隨身したまふ」(去來本)と矛盾に近い書き方したのである。諸説は無神経に「行先／＼に隨身」したのを『ほそ道』推敲時代の事として論じているが、この前程をふまない限り、理づめでいけば

「年月」とはこの奥書において月にも満たぬ日数（『芭蕉翁行状記』に従えば約三カ月）をしか指していないのである。さてこう考えて来ると、去來を前にして書写の願いを容れなかつた、もしくは持つていて見せなかつた芭蕉の態度とはどう解したらよいのだろうか。この不可解事の解明に杉浦先生は、芭蕉の生前同様に發表されなかつた他の四つの紀行文の例をあげ、「黒さうし」の逸話を援用されている。「野晒紀行」以来の研鑽に自ら結果を認められたこそ芭蕉ははじめて他人をわずらわせて清書までさせたのである。その事は客観的には、他の四つの紀行文と比較してみればそれらがいずれも推敲の余地ある事によつて明かである。胸中で自己満足の灯をともしていたにすぎない芭蕉に積極的な發表欲はなかつたとしても、当然自負する所ある労作を「さのみ見る所なし」とはいかにもきざな言い方である。「黒さうし」の著者土芳に關しては、安永三年板『芭蕉翁発句集』の序で蝶夢が「明和のはじめ伊賀の国上野に行て城士土田何某梨風老人が赤坂の家を訪に、あるじは翁の門人杜若が子にして風雅は翁の上足土芳が親弟なり。一夜閑談の序にかの翁の句の年歴の事を尋しに、あるじ曰、翁は生灌旅を栖とし給ひしもなを故郷の忘がたければにや、年／＼此国に帰りおはしては兄の松尾氏が許にやどり、江戸にては去年かゝる発句案じたり、都にてはこと

しきる句ありけりなどち語給ひけるを聞て、我師土芳みづから写しとどめて、貞享のはじめふたゝび此国へ帰り給ひしより元禄七年終焉のみぎりまで年歴をわかち記し置る書あり。伝写して坐右に有とて出してあたへて曰、翁に門人多き中にも土芳は同郷旧友のしたしみよりその心のくまをかくさず、誹諧を伝へて、己にその道の髓を得たり」と書いており、これによつて、芭蕉が快心の作ともいうべき『ほそ道』を「文学とは殆ど縁がなかつたと思へる田舎の兄に与へて了ふ無雜作さ」(前記論文の)は了解できるし、と同時に芭蕉がその快心作を土芳に見せようとしなかつたとは了解し難いのである。蝶夢は更に「明れば翁の住給ひし旧庵に伴ひ行て、文庫にひめ置たる土芳自筆の本書を見せしむ……別に蕉翁文集奥の細道の二冊あり。まことに一誦三嘆してそれより年月衣裏の底に入れ首にかけて秘藏す。」と書いている。この「奥の細道」は、明和七年の井筒屋板行本の跋に蝶夢が「古き反古の中に此細道の原本を得たり」といつているところのものかと思われるし、文の前後から判断して土芳による書写本の如くうけとられる。とすれば、土芳は松尾半左衛門の許に送られて来ている去来本を、それも板本が普及した後にわざ／＼写したとは考えられないから、これも板行前に読む事をえた一人として、写したに違いない。さて「黒さうし」にはこの少し前に、

『ほそ道』と同じ元禄十五年刊の『宇陀法師』に拠つたと思われる部分があり、従つて土芳は『ほそ道』の出版を承知の上でこの「黒さうし」の記事を書いた事になるが、それらしい形跡も見えない。又さういへば、芭蕉にとつての最長篇を「すこし書るよし」と表現したあたりも疑つて疑えない事はないのである。つまるところ「あるとしの旅行道の紀すこし書るよし」は『ほそ道』の事を言っているとはどうしても思い難く、もう一步譲つたとしても、それは推敲中の未完成な『ほそ道』についてであつたらうと思われる。芭蕉紀行文中における『ほそ道』の位置、『ほそ道』推敲中における芭蕉と去来の關係を思いあわせる時、芭蕉は元禄七年五月江戸より一旦帰郷した際、兄半左衛門の許に『ほそ道』を置いて来たので持つていなかつたのであるが、落柿舎を訪ねれば過ぎし日の滞在が思い出されて、去来に「かつ／＼ほのめかし」たとするのが一番自然な考え方のようだ。芭蕉がこの時の去来の願を忘れず、しかも臨終の床にそれを譲る旨遺言した事を思えば、ますます『ほそ道』の生成過程に去来が無縁の人ではなかつたという気がしてならない。かくて『ほそ道』は、芭蕉自らが兄半左衛門のいる故郷伊賀を措いて彼の芸術活動に「生前の契深かりし」近江の地からを埋めたように、これも「契深かりし」去来の許におくられたのである。路通

は芭蕉の晩年その仲が気まづくなつて離れていたのであるから、人聞きで書いた『芭蕉翁行状記』にはそれほど正確な記述は期待できない。『ほそ道』の内容についても知っていないばかりか、前掲の引用部においてさえ既に誤った記述をしている。

三番目に『ほそ道』の名が見えるのは支考の『笈日記』(元禄八年)である。元禄八年七月十五日署名の自序に「その外、奥羽の風流は、奥の細道にみづからかきて、洛の去来に残し侍り、潜淵庵が継尾集にもこもく出し侍るかし。」と述べているが内容はまだ目にしていない。『笈日記』は伊賀より難波へ旅立つ最後の芭蕉に随行した記録を以て書きおこしているが、この機会にも支考は原本に接してはいらない。それなのに『俳諧古今抄』(享保十一年)の中ではこの秋の言葉として、「奥の細道は、老の物ぐさに人をたのみて手蹟を先とせし筆者なれば、今いふ仮名真名のくぼりにおよばず。おほくは万葉の仮名がちに、今は我だによみやすからず。さはいへど此紀行はいまだ梓にちりばめぬほどは、難波のいとまを得て点検すべし。」とでたらめを書いている。もとより『俳諧古今抄』は、正徳元年自ら死んだと称して郷里に隠れた支考が、遺弟蓮二坊という名に仮托して自分の著述に註釈をほどこしたものだから信頼するに足らないが、先の言葉を今度は蓮二坊の名で「今や此稿の

なげく所は、その年その十月に祖翁は難波にて世を辞し給へば、武陵に残し給へる文章の反故は先師(支考自身のこと)の点検に任すべしとはさしてその紀行の事ならんに滅後に其道をあらためじとて、武洛の古老のかたくなに四半の紙数もさのごとく、例の筆者の一字をもたがはず落柿主人を證人にて世すずに書林にひろまりしが……」と読けている。支考の例のあつかましい自己宣伝としか思えない。無論、支考は芭蕉の遺書を代筆しているから「奥の細道」の存在は知っていたのだが、元禄八年八月十五日、洛の桃花坊(支考)に於て『笈日記』を校焉するまで、原本は去来の許にとどかなかつたものであろう。

四番目に『ほそ道』の名が見えるのは許六の『韻塞』(元禄九年)である。その中で「元禄九年 丙子冬 臘月日」の日附をもつた「風狂人が旅の賦并小序」に「旅は風雅の花、風雅は過客の魂、西行・宗祇の見残しは皆誹諧の情也。我翁白川の田植哥を聞初め、奥羽の間を廻り、高館の夏草に兵共が夢を驚し、あつみ山の夕すゞみには、吹浦をながめ、佐渡に横たふ天の川に初秋の袂をしぼる。それより蛤の二見を渡り、七百三十余程を吟ず。曾良が落髪の力量を感じ、一鉢の飯を分て風流を尽さる。ひとひはせを庵を敲き、晝の雑談に及ぶ時、序に旅十鉢の絵をかかせて、讀して何某が求めに応ず。其風雅にたより俗語をあつめ、狂賦

五段となす。穴賢。奥の細道草枕の類には非ず。」と書いてあるが、『ほそ道』の内容を確かに知っている書きぶりである。許六は元禄五年八月の入門以来、翌六年の五月迄江戸にあって親しく芭蕉に師事しており、殊に三月から四月にかけて芭蕉は許六宅に逗留し、此頃秘書を授けられたと迄許六は言っている。(自謙之語)この時期は芭蕉が完成を前にして『ほそ道』に手を入れていた頃だから、或いは生前の芭蕉からその草稿の一見を許されたのかもしれない。今度『俳諧大辞典』に紹介されている許六筆の芭蕉・曾良行脚図(野間光辰氏藏)は元禄六年の署名があるだけにこの間の想像を助けるものがある。

五番目に『ほそ道』の名が見えるのは桃隣の『陸奥衛』(元禄十一年刊)である。その中に「既今年三回忌、亡師の好む所にまかせ、元禄九子三月十七日、武江を霞に立て、関の白河は文月上旬に越ぬ。凡七百里の行脚、是を手向草、所くゝの吟行、懐旧の百韻、此等は師恩を忘れず、風雅を慕のみなり。紀行の文は奥の細道といへる物に憚り、唯名所・古跡の順路をしるし侍る。」と書いているのだが、この時桃隣は『ほそ道』の内容を一目して知っていた。というのは、元禄七年芭蕉の仆報に接した江戸蕉門が十月廿二日二派に分れて追悼歌仙を巻いている。桃隣はその深川中心のグループに加わって発句を受持っているのだが、この巻には

『ほそ道』を清書した素菴、素菴の写した別本を持っていったらしい杉風、芭蕉自筆の草稿本を持っていったらしい野(註三)坡、同じく草稿を写していた曾良等が一座しており、「故人も多く旅にはつと、逆旅過客のことはりをおもひよせて」というその前書から推して、『ほそ道』の冒頭が既に一座の人口に膾炙していた事がうかゞわれるからである。今日では、ともすると我々は『ほそ道』をもつてその旅のすべてと考えがちであるが、芭蕉の東北行脚はそれ自体が大きな文芸的意義をもつていた。去来が「故翁奥羽の行脚より都へ越えたまひける。当門のはい諧すでに一変す。」(贈言氏其角書)と言っているのもその証拠である。少くとも芭蕉歿後数年の間、芭蕉の旅そのものゝ生々しい意義にかくれて、『ほそ道』は作品的な客観性を与えられなかった。触発されて東北へ杖をひいた者も、芭蕉の直後から路通や支考等があり、各々一集を撰んでいるが、彼等は決して『ほそ道』の影響など受けていない。『陸奥衛』によって知られる桃隣の旅がおそらくはじめて、『ほそ道』によっていくらかでも触発されたのではなからうかと言える程度である。それも、只桃隣が『ほそ道』の内容を知っていたという事実からだけであって、芭蕉追慕の情の方がどれだけ大きな動機になっているかしのれない。ましてや『陸奥衛』という作品に与えた影響になると、それは「奥の細道といへ

る物に憚り」という否定的な形でしか表れていない。

以上が今のところ板行前の『ほそ道』の反響を知る文献資料のすべてである。それに関する限り、去来と、晩年の深川芭蕉庵に出入りしていた人の少数と、伊賀の松尾半左衛門と土芳、それ位が『ほそ道』の内容を確かに知っていたと思われる程度で、影響というほどのものはまだ見られないが、その存在だけは、彼等及び遺書開封に立合った其角や湖南蕉門の人々を中心にして小さな波紋をひろげていき、やがてその名を伝える板本のおかげもあって一つの普遍的常識に迄なっていたようである。元禄十一年刊『泊船集』の序で撰者風国が「先師芭蕉翁出で奥のはてまで西行宗祇の足あとをしたひありき給ひては紀行数冊に及び」とあっさりした書き方をしているところからみても、その予想される読者層の間で『ほそ道』という作品の存在はかなり知られていたらしい。このような情勢の中から元禄十年、『鳥の道』が『ほそ道』の千住から大聖寺迄の発句を前書附でまとめて十二句、ほとんど決定稿と変らぬまゝ世に紹介した。『ほそ道』の旅の途上に咲いた作品の数々はその年のうちから『四季千句』(撰白)『葱摺』(撰別)以下に次々と摘み拾われて来ており、もとより中には、その後手を加えられて『ほそ道』中にあみこまれた句及び前書も多く見られるが、すべて『ほそ道』という作品とまだ有機的

関係をもたぬまゝ、梓に上せられたものである。しかし『鳥の道』所収の十二句は、それ等『ほそ道』以前の原形と違って、明かに『ほそ道』という作品形成への意志が加わった或る一部であった。これが読者間に一つの触媒作用をなしたに違いない。五年後の元禄十五年、『ほそ道』は去来を奉行として井筒屋より出版された。出版は機に敏きをもつて良しと言う。門人達の間で芭蕉の心像が概念化するにつけて、『ほそ道』は作品として浮び上つて来ていた。かつては全人的な感化をうけた芭蕉の人格的な高さが時のたつまゝに形あるものへの結びつきを余儀なくされ出したのである。同年刊の『花見車』はこの元禄十五年という年を「松尾桃青出で、意味深長なる事をのべてうるはしくなしたるより、国々おもひつきて、四五年跡まで用いたる也。今は誰が家の風俗ともなく」と評している。俳壇地図が塗り代えられる前夜の空虚な時間の中で、師翁追慕の情が作品評価とすり代った。かくて『ほそ道』は出版のはじめから讃辞をもって迎えられ、それは又芭蕉を偶像化していった俳壇の中で疑われる事なく継承された。こゝで『ほそ道』はその旅から切り離され客観性を勝ちえたのではない。作品が前面に出て代りに旅が後にまわっただけである。所詮、芭蕉とその作品は影響史の上では切り離せない一つの対象であつた。

最後に一つ幸な事は、『ほそ道』が出版された二年後に去来はこの世を去っている。その後長い間原本は行方不明になっていたのだから、もし出版がこの機をのがしていたら、いつ又世に出る日があつただろうか。おそらくこのように正しい本文が流布する事はなかつたであろうという事である。

註一 養虫庵。尚、この引用部に関しては中村幸彦先生から分外の御恩を蒙った。

註二 去来の居所。当時落柿舎は改築しており、去来はその改築後の落柿舎で九月十二日、いわゆる去来本を書写し終えている。

註三 杉浦先生の論文において、この野坡のもっていた草稿本は、梅従に譲られ芭蕉の五十回忌法筵に飾られた事迄報告されたが、野坡門風律の『小ばなし』にも「一、芭蕉自筆の奥の細道は云々」と触れてある。『小ばなし』は今日原本が知られず、沼波瓊音氏が広島の人から送られた写しを「かいつまんで」、「此一筋」に載せられたものによるはかはないが、もし原本について沼波氏の省略された部分をも知り得ればもう少しはつきりした事がわかるかもしれないと思えば残念である。